

# シリーズ「肺がん」②

## 肺がん画像診断と放射線治療

国立病院機構和歌山病院

診療放射線技師 夏目久司

肺がんは、血痰や咳嗽(がいそう)などの症状により見つかる場合と症状はないが検診で異常を指摘され、精査の結果見つかる場合の大きく2つに分かれます。肺がんの診断は、胸部X線検査、胸部CT検査、内視鏡(気管支鏡)検査、喀痰検査を主とします。早期肺がん手術後の5年生存率は7割程度ありますが、1cm以下のがんは発見することが難しく、2cmを超えるがんが見つかった時には約2〜3割に転移があると言われ、予後は良くありません。よって、最も重要なことは他のがんと同じで早期発見、早期治療です。現在、一般的に広く行われている胸部X線検査だけでは、骨・心臓・血管等の臓器に重なる病変を発見するのが困難ですが、胸部CT検査を併用することによって、胸部X線検査で発見が難しい1cm以下の小さな陰影や淡い陰影の肺がんを発見することができ、骨・心臓・血管などはタメシが小さくすみ

では目に見える効果はほとんどありませんが、それらが集積されてがんの縮小、消失といった結果となります。がんを治療すると共に、副作用を十分許容できる限度に抑え、将来にわたって機能・形態を温存できる様に治療の計画を立て実行します。病巣が小さく原発巣に留まっている早期肺がんに対しては、放射線治療は特に大きな効果が期待できます。手術をして病巣を摘出するのと変わらないほどの効果を發揮できる場合もあります。そして、身体への負担が少ないので高齢で手術に耐えられない方や合併症、あるいは切除が困難な場所に腫瘍があっても治療を行うことがあります。毎回、同じ場所に精密照射するために特別なマスクや装具を使うこともありますが、一回の照射時間は1〜2分間で、痛みや熱さといった感覚はなく治療を終えることができます。

今回は放射線治療についてお話しします。放射線療法とは、がん細胞に放射線を集中的に照射し治療を目的します。しかし正常細胞にも放射線が当たると分割困難ですが、胸部CT検査を併用することによって、胸部X線検査で発見が難しい1cm以下の小さな陰影や淡い陰影の肺がんを発見することができ、骨・心臓・血管などはタメシが小さくすみ

最後にりましたが、肺がんは腫瘍が大きくなるまで無症状のことが多く早期発見し難いことがあります。早期発見が治療の際に重要なため、年に1回は肺がん検診を受けてみてはいかがでしょうか。

今回お話しするのは、放射線療法とは、がん細胞に放射線を集中的に照射し治療を目的します。しかし正常細胞にも放射線が当たると分割困難ですが、胸部CT検査を併用することによって、胸部X線検査で発見が難しい1cm以下の小さな陰影や淡い陰影の肺がんを発見することができ、骨・心臓・血管などはタメシが小さくすみ

最後にりましたが、肺がんは腫瘍が大きくなるまで無症状のことが多く早期発見し難いことがあります。早期発見が治療の際に重要なため、年に1回は肺がん検診を受けてみてはいかがでしょうか。